



## 馬耳東風

東京のど真ん中、銀座の植え込みがっちりした「稲架掛け」がここ数年出現する。薫る実りの秋がなんとオフィス街にやってくる。支柱は丸太を組み合わせ藁縄でしっかり固定されている。三段掛けで見事に熟した穂をつけた稲束が当然ながら逆さに竿をまたいで行儀よく並ぶ。コンバインで脱穀細断せず、天日干しの稲架掛け用に結束したものだ。投げ手と受け取り手の手際よい掛け声が聞こえてきそうだ。鳥よけの窠山子代わりに眼を凝らさないと分からない5本のテグスが横に張られ、きめ細かな現場熟練の技をうかがわせる。間違うと人が引っかかってしまう。収穫の秋、NHK連続テレビ小説「ひよっこ」の田んぼの収穫風景を思い出す。農耕の血を引く都会人に土と生活の匂いを運び込んだ。

コンバインと乾燥施設の普及で機械化・省力化が進み、天日に頼る「はざがけ」風景は少なくなった。稲束の運び出しの便宜から畦道の近くに設けられることが多い。1本の棒を立て、周りから傘状にぐるぐる積み重ねて仕上げるもの、あるいは洗濯物の物干し似の姿は、いかにも里山と狭い棚田にぴったりの風情である。繁忙期の田んぼのにぎわいは、生きる糧そのものだ。落葉高木のトネリコ（もくせい科）はアッシュと呼ばれ、材質は硬く運動用具やステッキ材として知られているが、新潟市夏井の“はざ木”は屏風のような街道を成し、機械化が進むまで天日干しの柱の役割をしっかりと担っていたが、今や残った街道風景が観光資源化したそうだ。

人気の「はざがけ米」に米どころ魚沼産コシヒカリが

スキー場のリフトを使って2段2列に整然と天日干しされ、まさに「天空米」と名付け注目されている。秋風に触れ天日に輝く稲穂は、うまみの増した最高の米になることは間違いない。天と地の恵みを満身に受けた神からの授かりものだ。稲架はまさに季語の代表である。

脱穀後の藁は、飼肥料や敷料あるいは民芸具の貴重な素材になる。農家の冬場仕事で生活を支える。藁縄や草鞋は立派な民芸品だ。鳥居の大注連縄は、神前に不浄なものへの侵入を禁ずる印として張るが、藁を適度に湿してすぐり、碇でたたいてしなやかに手で緬いやすくする。特に鳥居のそれは、かなり個性的なのが多く土地柄を物語るものだ。今や合成繊維物も出てきたが、稲藁豊富に大勢の力を集めて造られる。

都心から転入のIT仕事の若者に声掛けしたところ、喜々として注連縄作りに汗を流して頂いた。手を動かしながら語ってくれた。品川生まれで銀座に通うが神社にかかわったのは初めてだそうだ。手を出そうにも出せなかったと。3人がかりで呼吸を合わせて3本を1本に緬いあげ、多くの氏子の手を経て鳥居に取り付け奉納する。「田園回帰」が政策用語として登場したが、その民俗版というところか。仲間入りした若者の顔は明るく、当たり前のように声が弾む。風土色満杯の秋祭りの季節がやってきた。食農を守る感謝と決意の季節だが、国内自給率は38%に低下し、温暖化の影響でイネの耐熱品種の推進中だ。今年の高温とゲリラ豪雨は災害に結びついた。どうやら天候不順と自由化偏重のつけが表面化したようだ。

(柏)